

退任のごあいさつ

本日付けをもちまして、京都市PTA連絡協議会(以下「市P連」という。)会長を退任いたしました。この大役を務めさせていただきましたのも、多くの皆様に支えられ、ご理解、ご協力いただいた賜物と心より感謝申し上げます。

私が市P連に関わり始めたのは、5年前の平成29年4月のことでした。

子どもが通う小学校のPTAでクラス委員を経験し、「PTA、このままではあかん」と思い、初めて本部役員(副会長)になった年、たまたま自校が輪番で「はぐくみ委員会」の支部代表校に当たっていたのでした。何もわかっていない私が、京都アスニーに初めて出かけた会議で、頼まれるまま、うっかり全市のはぐくみ委員長を引受けてしまったのが始まりです。後で知ったことですが、その当時は、はぐくみ委員長は、京都市小学校PTA連絡協議会(以下「小P連」という。)の役員の一員であり、それはそのまま市P連理事でもあったのです。

その後、自校のPTA会長となり、小P連役員を3年、そのうち小P連会長を2年、また市P連会長を1年、務めさせていただきました。

振り返りますと、自校のPTAの在り方から始まり、はぐくみ委員会の在り方、PTAフェスティバルの在り方、小P連の在り方、支部活動(コーラスやバレーボール交歓会)の在り方、市P連の在り方等、京都市のPTA活動の在り方に正面から向き合ってきた5年間でした。

その中で、常に私の中心にあったのは、「各校の保護者の絆を守りたい」ということでした。同じ学校に子どもを通わせる保護者同士で連携する、そして、子どもたちのために協力をする、ほとんどの保護者はこうした絆を望んでいます。

しかし、そのために組織されているはずのPTAに対し、現在、大きな負担感を抱く保護者が多く、PTA離れが進んでいるのが現実です。

これは、現役の保護者が怠惰なわけでも、子育てに無関心なわけでもありません。原則単年度で役員が入れ替わるという組織の性質上、前例踏襲を基本として運営されてきたPTAが、共働き家庭の増加などの社会情勢や、加入意思の確認が必須となる等の環境の変化により、いよいよ限界を迎えたこと、また、各校のPTAから市P連、そしてさらにその上の団体と、全国規模のピラミッド構造が制度疲労を起こしていることに起因していると考えます。

市P連という運営側の立場にある中で、PTAに対して多くの批判の声が聞こえてきました。しかしその多くは「見直して変わって欲しい」という切実な願いと捉えてきました。その願いが叶う期待が全くできない、となったときに「PTAから離れる」という選択になってしまうのだと思います。

運営側としては、既成概念に囚われ、批判の声を「アンチPTA」という言葉の壁でシャットアウトするのではなく、どうしてそのような声が上がっているのか、何に困っているのか、それに対し何ができるのか、多様な声に寄り添い、共に考え、共に歩む姿勢が大切と感じてきました。

市P連会長としての最後の一年は、「現在、PTAがつかないでいる各校の保護者の絆を守るために、何ができるか」、その思いから、京都市のPTA全体で、より多くの保護者に安心して入ってもらえるような組織へと前進することを目指して「京都市型PTA」を提案し、市P連理事会でも議論を進めてまいりました。

組織運営に関しては、その組織の目的や役割を正しく理解した上で、判断する立場にある者が議論をし、結論を出す。その積み重ねが、組織をより良い方向へ導くものと考えます。

引き続き、オープンな場で、建設的な議論がなされることを期待しております。

今後は、自校のPTA会長として、引き続きPTA活動に携わってまいります。これまでの御支援に感謝申し上げます。

ありがとうございました。

令和4年6月1日

京都市PTA連絡協議会
令和3年度会長 大森勢津